

## 7月4日 年間第14主日

イザ 66:10~14 ガラ 6:14~18 ルカ 10:1-12,17-20

### 1. ルカ

我が国の現在の翻訳聖書では、福音書の中の段落毎に、他の福音書に共通箇所がある場合にはそれが示されています。今朝の福音書の朗読部分にそれが欠けているのは、これがルカ特殊資料と呼ばれるものだからです。

この部分はおおむね マタ 9:37-38, 10:7-16 と共通していて、ルカは同じ資料を使ってこの物語りを書いたと推測されます。私たちは、イエスの語録や御業に関する伝承がいくつもの段階を経てその材料として採用された、いわば“出来上がった福音書”を読んでいるのです。そういう意味での、そのあるがままの聖書から、神が現在の私たちに何を語っておられるのかを聞くという姿勢が、主の羊である私たちには大切なのです。

イエスは御自分が自ら進み行くのに先立って、72人を派遣されました(v.1)。彼らの使命は、9:2にもある通り、“その町の病人をいやし、神の国はあなたがたに近づいたと宣べ伝える”ことでありました(v.9)。恐らくルカ福音書はここで、キリストの福音が当時の地中海世界にくまなく伝えられて行った使徒たちの宣教を、念頭に置いていたことでしょう。

神の国を宣べ伝えることと、キリストの福音を宣教することは一つでありますから、これを切り離したり、一方を除外して他方のみを語ることは出来ません。キリストの福音は、私たちが罪と死と悪魔の支配から救う神の力ですから、使徒たちの宣教には病人を悪霊から解放するいやしが伴いました。しかし、イエスは言われました。

v.20 「悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

“信じる者すべてに救いをもたらす神の力”(ロマ 1:16)である福音が、確かに宣教されているということがなければ、教会のどのような慈善も愛の奉仕も、それだけでは“神の国を宣べ伝えている”ことにはなりません。“その名が天に書き記されている人々”(ダニ 12:1)の意味を、真剣に考えるようにしましょう。

### 2. ガラ

v.14 「しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。」

私たち信者が“キリストを誇る”と言うとき、それは“私はキリストと共に死に、今はキリストと共に生きている”ということです(2:19-20、ロマ 6:3-11、コロ 2:12)。決して自分の善行や知識を誇ることはありません(ロマ 3:27、1コリ 1:29)。そしてそうであれば当然、私もキリストの十字架の福音を宣べ伝えて歩んで

来たということ、誇る事が出来ます(ロマ 15:17-19、II コリ 10:12-18)。

私たち信者は、この点でいささかも聖職位階にある人々よりも、自分は責任が軽いなどと思ってはなりません。それで教会憲章 30 は、「神の民について言われたすべてのことは、信徒、修道者、聖職者に平等に向けられている」と述べているのです。

### 3. イザ

v.10 「エルサレムと共に喜び祝い、彼女のゆえに喜び踊れ、彼女を愛するすべての人よ。」

キリスト者とは、天のエルサレムを待望し、愛する人々です(エフェ 1:18-23、黙 21:1-8)。この希望を理解しない人は、聖書を読んでも何も得ることが出来ないし、カトリック教会のミサや秘跡にあずかっても“神からの慰め”(v.11,13)を受けることが出来ません。

この「聖書の学び」が、「主の羊たちが御言葉によって命を受けるため」(ヨハ 10:10)の、またイエス・キリストが罪と死と悪魔の支配からの救いをもって、「すべての町や村を」(ルカ 10:1)訪れてくださるための、それに先立つささやかな奉仕となりますように。

「あなたの御言葉は、わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯。」(詩 119:105)

ハレルヤ、アーメン。

## 7月11日 年間第15主日

申 30:10~14    コロ 1:15~20    ルカ 10:25~37

### 1. ルカ

v.37 「行って、あなたも同じようにしなさい。」

これは聖書の中にある物語りであって、学校の道徳の教科書の教材として作られた話ではありません。先ず注目すべきことは、vv.25-28は マコ 12:28-31 に基づいているように思われるのですが、ルカにおいてはその主題は“永遠の命を受け継ぐ”ことになっていることです。“何が第一の掟か”ではありません。次に注目したいのは、“わたしの隣人とはだれですか”という質問に対して、“あなたは・・・だれが・・・隣人になったと思うか”という逆質問でイエスが答えていることです。

“永遠の命を受け継ぐ”という概念を、現代人は“個人的な幸い”のこのように考えますが、聖書ではこれは“聖なる民の共同体”について言われているもので(ダニ 7:18,27, 12:1-3)、ルカ福音書におけるその背景は、12:32の「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」なのです。“そのために、何をしたらよいのか”ということが、この譬え話の本来の主題です。

聖なる民の共同体である教会の中にある“あなたの隣人の候補者”として、この“追いはぎに襲われた人”が描かれていることに気づくことが大切なのです。あなたは教会の中で、そのような“候補者”の隣人になりましたか、と問いかけています。

世間では、“外面は良くても、家に帰ると暴君”というような人がいるように、教会でもそれに似た信者たちが、“外面としての善行”によって体面を保持しているという傾向があるからです。

### 2. コロ

vv.19-20 「神は・・・、(御子の)十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」

神が御子イエスによって実現してくださった和解は、“万物”に対するものでありますが、教会はこのイエスのみを礼拝の対象として受け入れた信仰共同体です。ですから教会の宣教の言葉は、「神と和解させていただきなさい」なのです(II コリ 5:20)。今やキリスト者にとっては、「世を支配する諸霊」は礼拝の対象ではなくなりました(2:20、ガラ 4:8-11、I テモ 4:1-5)。「御子は、…… こうして、すべてのことにおいて第一の者となられたのです。」(v.18)

キリスト者とは、この教会に所属してる人々のことであって、一人一人はその部分です(I コリ 12:27)。このことを前提にして、聖書は“友”(ヨハ 15:13-15)、“兄弟”(ヘブ 2:11、Iヨハ 3:14-18)という用語を使っていることに注目しましょう。「この教会は、この世に設立され組織された社会としては、…… カトリック教会のうちに存在する」(教会憲章 8)という宣言の意味を、私たちは深く考えたいものです。そうなのです。確

かにカトリック教会では、「神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。」(1ヨハ4:21)

### 3. 申

v.14 「御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。」

ユダヤ教では、申6:4-9にあるように、聖書を子供たちに繰り返し教え、また各自がこれを繰り返し口に唱えることが、信仰深い人々の日常行為でありました。「あなたの口と心にある」とは、そういう意味です。使徒パウロは、このテキストを引用して、「信仰による義については、こう述べられています」と言うことが出来ました(ロマ10:5-13)。なぜなら原始教会は、使徒たちの宣教によって生きていたからです。

カトリック教会は、“使徒たちから伝えられたこと(聖伝と聖書)”を、今日に至るまで大切にしてきました。そのことは、“第二バチカン公会議の公文書集”でも、“カトリック教会のカテキズム”でも、非常に明確にされ、強調されていることです。ですから、信者一人一人が聖書に親しんで、「御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にある」ということが、当然であるように成長することが、切に勧められているのです。

この勧めは、決して「難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。」(v.11) 特別な訓練や、特別な資格を必要とするものではないから、誰か偉い先生に講義してもらわなければ理解出来ないなどということはありません。あなたが毎日、新聞や雑誌や小説を読むように、それは手軽に読むことが出来るのです。恐らく普通の日本人の読書力なら、新約聖書を読むのに何ヶ月もかかりはしないし、旧約聖書だって一年もかかることはありません。

「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉(福音)を聞くことによって始まるのです。」(ロマ10:17) 共にミサをささげるすべてのカトリック信者の上に、主の恵みと祝福がありますように。

ハレルヤ、アーメン。

## 7月18日 年間第16主日

創 18:1～10    コロ 1:24～28    ルカ 10:38～42

### 1. ルカ

v.41-42 「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

“全くその通りだ！”と、たいていの人は身にしみて納得します。それでは、“あなたは必要なただ一つのことを選んでいますか”と問われると、恐らく普通のカトリックの子らは、自分にとって何が“必要なただ一つのこと”なのかを知らないことに気づきます。

“必要なただ一つのこと”は、イエス・キリストが使徒たちの宣教を通して私たちに教えてくださるものであって、私たちが時代や境遇に応じて、自分で考え出したり決断したりすることではありません。それは「難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。」それは「あなたのごく近くにあり……」(申 30:11-14)と書かれている通り、私たちが聖伝と聖書を通して今も語り続けている使徒たちの宣教に、「聞き入る」(v.39)ことによって理解するのです。

新約聖書は、使徒たちの宣教を記録する諸文書を集めて、2世紀頃に教会が創った正典であって、いわばその後の時代における福音の歪曲を最小限に食い止めるために、聖伝と共に教会が啓示の源泉として大切にされて来たものです。

### 2. コロ

v.25 「神は御言葉をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのために、わたしは教会に仕える者となりました。」

御言葉を伝えることが“務め”であるように、その伝えられた御言葉を私たちが聞くこともまた“務め”であるということを理解しましょう。この“務め(διακονία)”という用語は元来、食卓で給仕する奴隷の務めを意味しています(ルカ 17:8)。キリストこそは“主の僕なるメシア”でありますから、キリスト者はこの“主の僕なるメシア”に仕える“しもべ”です。

そこで、この“御言葉(福音)”の内容が正しく理解され、語られ、また聞かれなければなりません。それが「世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画」(v.26)です。現代のカトリック教会で、各国のそれぞれの小教区のミサで、司祭たちはこの「秘められた計画」を伝える務めを果たしているのでしょうか。私たち信者は、この「秘められた計画」を理解するために、聖伝と聖書に“聞き入って”いるのでしょうか。天上のキリストの声が今朝も私たちに、「悔い改めて福音を信じなさい」(マコ 1:15)と、祭壇から、また聖書朗読台から呼びかけています。あなたにはそれが聞こえていますか？

この「秘められた計画」とは、異邦人である私たちが今やキリスト・イエスの救いによって、来るべき御

国を受け継ぐ者とされたということです(エフェ3:6)。「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました」(エフェ1:7)という救いの事実が明確に捉えられている人々 …… 聖なる者たち(1:2) …… にとって、「その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。」(v.27)

### 3. 創

v.3 「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。」

この「よろしければ」とは、言うまでもなく相手の好意を期待して使う言葉です。口語訳聖書では「わが主よ、もしわたしがあなたの前に恵みを得ているなら」と直訳されていました。現代人にとってはこれは“遠回しな表現”に聞こえてしまうので、新共同訳聖書では工夫して意識したのです。

アブラハムは三人の御使いを迎えて、「彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。」アブラハムがお客を歓待して食事を振る舞った話のように思ってはなりません。私たちは、イエスが「しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である」(マタ22:27)と言われたのを、ここで想起するのです。そして、アブラハムは神の恵みを得て、約束の言葉を聞きました(v.10)。

私たちキリスト者がささげるミサは、罪人の群れである私たちのただ中に、「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ4:25)キリストが来てくださる場であり、聖霊が私たちに知恵と理解を与えて「秘められた計画」を知らせてくださる(エフェ1:8-9)恵みの宴です。私たち信者は、“いろいろのもてなしのための” “多くのことに思い悩む” こと以前に、先ず“必要なことはただ一つ”、すなわち“キリストの福音に聞き入る” ことの大切さを理解しましょう。

主が、カトリックの子らに知恵と啓示との霊を与えて、“キリストの福音” と “栄光の希望” を悟らせてくださいますように(コロ1:27-28、エフェ1:17-19)。

ハレルヤ、アーメン。

## 7月25日 年間第17主日

創 18:20～32    コロ 2:12～14    ルカ 11:1～13

### 1. ルカ

感謝の典礼における奉獻に続いて、交わりの儀の冒頭で、私たちは主の祈りを唱えます。このようなミサの構造は、カトリック教会が積み上げてきた歴史的遺産であって、実に感嘆に値するものです。主の祈りが別の機会に祈られても、いつもその意味は、「わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます。国と力と栄光は、限りなくあなたのもの」という副文に明らかな通り、主の再臨と御国の完成への待望です。

このような「福音の希望」(コロ 1:23)が、会衆の間にいつも生き活きと抱かれているようにと、聖書は私たちに語りかけています。“祈る”しかも“熱心に祈る”ということが、従来カトリック教会ではあまり信者に指導されては来なかったように、見受けられます。しかし、v.8の「しつように頼めば」を、プロテスタントの一部の教派で主張されているように、“祈りの力で神を動かす”などと理解するのも、ずいぶん過激な逸脱でしょう。

それよりも、今朝の福音書の物語りが私たちに問いかけているのは、“あなたは本気で祈っていますか”ということです。なぜなら多くのカトリック信者が、自分が祈っている事柄を神が実現してくださるなどとは、少しも考えていないからです。それ以上に、“神がキリストによって実現される計画”(エフェ 3:4,9)とは何の関係もない、勝手な思いつきや空想を並べたてて、祈ったつもりになっている……、だから少しも本気ではない……ということが多いのです。

「あなたがたは、…… 神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは“アッバ、父よ”と呼ぶのです。」(ロマ 8:15) このような信仰体験の上に立ってこそ、私たちは主の御言葉を感謝のうちに理解することが出来ます。

v.13 「まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」

### 2. コロ

新約聖書が語り、古代の教父たちが論じたキリストの贖いについての説明は、一貫して神話的表現を用いて述べられているのがその特徴です。すなわち、イエス・キリストは死者の中から復活して、かつて私たちに支配していた悪の力、すなわち“悪魔”と“罪”と“死”に勝利され、私たちを神の怒りから救ってくださいました(エフェ 2:1-8 参照)。

新約聖書が語っている救いとは、洗礼によってこのキリストの勝利に結びつけられ、キリストの体に属する者(1コリ 12:27)、神のイスラエル(ガラ 6:16)とされることです。「罪の中にいて死んでいたあなたがたを、神はキリストと共に生かしてくださったのです。」(v.13) 実に、“十字架につけられて死に、葬られ、……

死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父である神の右の座に”着かれたキリストの勝利の出来事の上に、私たちの救いはあるのです。

### 3. 創

v.32 「主は言われた。“その十人のためにわたしは滅ぼさない。”」

結果はその十人がいなかったということで、このアブラハムに関する伝承はキリストの福音と結びつくのです。今日でも、自分たちがそのような十人になることが、キリスト者の使命だと思い込んでいるような人がいるものです。そのような偽善者たちが、教会の中には実際にいるのです。

「正しい者はいない。一人もない。」(ロマ 3:10) 「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています、」(ロマ 3:23) 「神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。」(ロマ 11:32) そのような私たちの罪のために、神は「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリスト」(マタ 1:1)を「その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。」(ロマ 3:25) 私たちの“罪と死と滅び”のすべてを、キリストが“自らその身に担ってくださった”(1ペト 2:24)ことに、私たちの救いがあるのです。

アブラハムはソドムのために執り成し、必死になってこの町を救おうとしました。しかし、救いは「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で」(ロマ 3:24)、賜物として与えられました。ここに「信仰の法則」(ロマ 3:27)があります。

カトリックの子らの祈りが、また主日のミサ毎にささげられる共同祈願が、この「信仰の法則」に根ざして、“本気で祈る”ものに成長しますように。主よ、われらをあわれみたまえ。

ハレルヤ、アーメン。